

生徒が迎える「男の子の日」の話

pixivに投稿した作品の加筆修正版と
本書用の書き下ろし
計5作品が収録されています

目次

おねだりしてよ 005

風倉モエ 空井サキ

(Pixiv再録・加筆版)

人肌 025

白石ウタハ 各務チヒロ

(Pixiv再録・加筆版)

Memory Too Perfect 045

早瀬ユウカ 生塩ノア

(Pixiv再録・加筆版)

天使の顔した小悪魔 061

栗村アイリ 杏山カズサ

(2024年刊行「背徳の快-トリニティ官能小説合同- 増刊号」収録 加筆版)

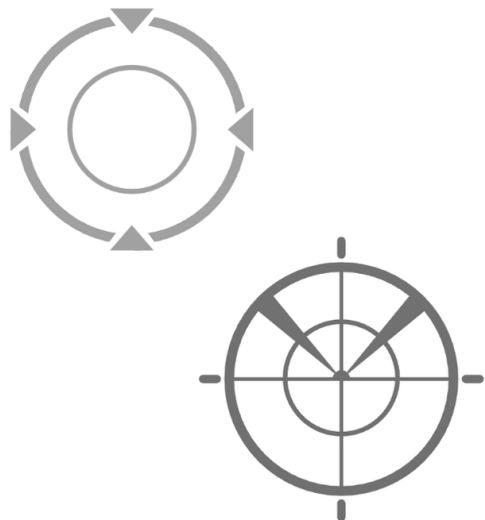
月と太陽が重なる日 081

朱城ルミ 鹿山レイジョ

(本誌書き下ろし)

※1冊の本にまとめることを想定せずに書いていたせいか、シチュエーションがふた受けに偏っています

おねだりしてよ



Featuring
風倉モエ
空井サキ

サキは快感に弱すぎるのかもしれない。
それでも私にバカにされたくなくて、
一生懸命に腰を振っている。
健気で、可愛くて……ちよっぴり愛しい。
両手を伸ばして、抱きしめたくなる。

風呂上がりに見た光景は、いけない興味を掻き立てた。

夜戸浦村での調査任務はそこそ順調。先生の交渉で、村の外れの空き家がR A B B I T小隊の前線基地になった。少し古くなっている部分はあつたけれど、公園のテントに比べたら十分すぎる。

ただまあ、ベッドを一人で使えたらな、と思わなくてはなかった。寢床まで共有する生活にも、すっかり慣れきっていたけれど。

深夜出勤にならないといいな、なんてボヤキと共に寢室のドアを開くと、サキがベッドの隅にうずくまっていた。お腹を押さえている。夕飯の魚に中^{あた}つたのかな。いや、耳が赤いし、そうじゃなさそう。

「モエ……その……」

もじもじするサキ。その腰にはブランケットが巻きついていてた。「見られたら困るものがある」つて、暗に訴えている。

ああ、もしかして。

覚えのある眺めに唇が吊り上がる。

「どしたの？『あの日』？」

「そ……そうだ……」

言いにくそうにサキは頷いた。

男の子の日。

アレが「生えてくる」日。

私たちにとってそれは祝福でも呪いでもあると思う。一度生えたらギンギンで、そのままじゃスカートも穿けない。かといって痩せ我慢は、そのまま欲求不満を膨らませるだけ。

子どもが欲しくなつたらしいけど、学生のうちは悪いことの方が多いかも。

「手伝おつか？」

「……またモエに頼むのか」

「気が進まないなら別にいいけど？」

くそつ、とサキが悪態をついた。ほくそ笑む私と、そうするしかない菌痒さに。

可哀想なことに、一人ではうまく『男の子の日』をやりすぎせない子もいる。やり方が分かつてても気が散ってしまったたり、あるいは触りたくなかったり。

そういう子はたいていパートナーがいる。自分から見つけるのか、相手から見つけてもらうのかは知らないけど。それで、どういうわけか、サキの面倒はいつの間にか私が見ることになっている。

「ほら、手をどけて」

「うう、でも……！」

「何度目だと思つてんの、このやり取り」

「あつ、ああつ……！」

恥ずかしがるサキからブランケットを引つpegす。ドルフィンパンツには畑の畝みたいな膨らみがボコツと影を作り、ピンクの生地がパツパツに張り詰めていた。

「……」

「んゝ、凄ね、パンツパンだね♥」

男の子の日のお世話は好きな方だ。恥ずかしがる姿には鼓動が高鳴るし、やつちやいけないことをやる背徳感私の御馳走。マニユアル第一主義の生意気で堅物なサキ——彼女があげる声は、細くて弱くて、可愛らしくて。快感に翻弄される顔を見ていると、心のおちんぼがぶつとくなくなっていく。

それに、手伝ってあげれば貸しにもなる。私に『あの日』が来た時に処理を手伝わせることもできる。Win—Winってヤツだね。

「あつ……」

一番刺激の強い裏筋の縫い目を布地越しに探り当てる。サキは体を震わせて、声を擧めた。

そのままこちょこちょと弄んであげると唇を噛んでしまうサキのガチガチな男の子は期待にピクピク震えて、ドルフィンパンツのゴムをぐんぐん持ち上げていた。

お楽しみ始まりだ。どうやってヌキヌキしてあげようかな。受けに回らせて可愛がるのもいい。

私の体を好きに使わせてあげてもいい。

どう転んだって私の好奇心は満たされる。

サキをそつと押して、ベッドに寝かせた。添い寝で向かい合うと、サキが気まずそうに目を逸らした。

「なに」

「いや……なんでも」

見詰め合うのが照れ臭いのは分かる。ケンカもする仲だから、しおらしいところを見ちゃうと気まずさを覚える。まるで、コーヒーのお砂糖をこぼしちゃったときみたいに。

引き締まった腿を撫でていると、サキが静かになつていく。だんだん「その気」になつていく。シャイで、ウブで、口答えはするくせに、ちよつとずつ素直になつていく。

知ってるんだよ。本当はスケベな教本だつてたくさん読んでるくせにさ。なのにどうしてそんな受け身なの。ちよつとぐらいグイグイ来たつていい。強引なサキだつて、私は——見てみたい。

「う……っ……」

硬い膨らみを、柔らかに撫でる。ショートパンツの向こう側からぐつと押し返してきた。タマタマを軽く揉んで、ファスナーを上げるみたいに、根本からなぞり上げる。

亀頭の裏筋に指をコスコス滑らせたら、サキは腰を持ち上げて、まるでおねだりみたい。

「っ、あ♥ あア……♥ つ、ひ……♥」

「くひひ……いつからおつきくしてたの？」

「ゆ、夕飯の、ときには、もう……あつ♡ そこお……♡」

かりかりかり、とパンツを引つ搔く。サキの声はもう上擦っている。

このまま竿をゴシゴシすれば、射精まではきつと一直線。でも、すぐにいい思いはさせない。意地悪して、遠回りさせて、焦れて焦れて仕方なくなったら、思いっきり――。

そうやって、溜めてから発射する快感を刻み込まれている。本当はおちんぼの弄り方だって覚えたのに、私に処理してもらいたがる。虐められたいのかな？ とにかく、サキはこうしてもらうのが好きなのだ。

「はッ、ふうう……♡ んっ……♡」

布地越しになぞるだけ。そのもどかしい快感をできるだけ味わおうと、サキはくねくね腰を振る。それがどれだけいやらしいのか、全然気がついていない。頭の中が「出したい」でいっぱいなのかな。早く楽にしてあげたかったけれど、私はパツと手を離れた。

「え？ も……モエ、なんで止めるんだ、なんで……っ」

物欲しげなサキを笑いたくなる。でも、笑いを堪えつつ、両手を胴体へ上らせる。

「サキのおっぱい、弄りなくなっちゃった♡」

「なん……っ！ お、お前にもデカいのがついてるだろ！ 触

るなら自分のにしろ！」

「自分の触つてもしょうがないじゃん。いいから、こねこねさせてよ。くひひ♡」

「ん、あ……こ、コラ、モエっ……♡」

抗議を無視して、白Tシャツの上から揉みしだく。サイズは私の方がちよつと上。それでも、サキのそれは私の手に余る。弾力が強い。たとえるなら、柔らかなめの蒟蒻に手を包まれるみたい。もみもみ。ふにふに。柔らかくて、瑞々しくて、手が気持ちいい。口元がだらしなく緩んでいるのが、自分でも分かる。

曲面をスリスリしていると、ぼちつとした粒が掌に当たった。ここもいじつてよ♡って、期待している。

「は、ん……♡ あつ、く……♡」

すりすり。すりすり。浮き上がる乳首を尻目に、周りを責める。シャツの下にはスポーツブラの感触があるけれど、持ち上がる乳輪が指を押し返してくる。

「勿体ぶるな……っ、なんで、ひ……い……♡」

私も乳首は感じやすい。じれつたいよね。焦らされるのって切ないよね。ピンと張ったそこを、摘まんんだり、捏ねたり、扱いたり、弾いたり、きつと色々してほしいよね。

それに、さつき甘く撫でただけのおちんぼも、お世話してほしいよね。

「まずさ、おっぱいだけでイッてみようか」

サキの股に膝を入れて押さえつけた。これで腰は振れない。窮屈そうなおちんぼが、一生懸命暴れている。むぎゅっ♡とおっぱいを掴んだら、布地がこんもり持ち上がる。

「くひひ♡ ちゃんと下にも響いてるじゃん♡」

「くそ……この……っ……」

「ほらほら、腰動かしちゃダメだよ。ちゃんとムネに集中して♡」

私も焦れていた。早くサキが悶えるところを見たい。すっかり開発された大粒乳首を指で潰して、喧嘩仲間をよがらせたい。膝で押さえつけたおちんぼだつて、手でしごいてイかせてあげたい。お互いが我慢しているなんて馬鹿みたい。そう思いつつも、私はサキを勿体ぶった。

「……ふうっ♡ ううう……っ……♡」

「ふふん♡ じつとしてられないね♡ もう音を上げちゃう？」

「う……うるさい、っ……」

子犬の鳴き声みたいな、弱い口答え。

「へえ、まだ余裕じゃん♡」

「な……あ……っ♡」

時に優しく、時に強引に。でも、乳首の周りだけ。

おっきなお肉をぐにぐに揉んで、感覚をリセットさせて、また円を狭めて。時々、ほんの一瞬だけ、事故を装って、先っぱの先っぱをかりっ♡と掠めてあげる。

そうやって、五分か、十分か。サキは荒い吐息を少しずつ唇から逃がして、懸命に耐えていた。それでいて、私の指が乳首に触れるのを期待して、胴を振っている。

「はっ……♡ あっ♡ ん、ん……♡」

顔は真っ赤で、目も潤んでいる。生真面目な口から、甘い声が漏れている。膝に当たるおちんぼは、今にもドルフィンパンツを突き破りそう。

ご褒美をあげたらどうなるんだろう。風船に針を刺すような、スリリングな興奮が込み上げてくる。

「モエ、っ……！ も、いい加減に、しろ……っ♡ ふっ……ふう……♡」

いつまでもゆるゆる責めてばかりの私を、サキは涙目で睨みつけた。さすがに限界かな。意地悪しすぎて蹴られたこともある。あと少しだけ弄んだら、いっばい気持ちよくしてあげよう。「焦らされるの辛い？」

「あ……♡ っ、っ……辛い……♡ どうしてモエはいつも、意地悪っ……するんだっ……♡」

「くひひ♡ そんなの、サキが可愛いからに決まってるじゃん♡」

かりかり、すりすり。引つ掻きながらサキをからかう。恨み言を言いながら、体はもう甘えている。胸を突き出し、身を振って、乳首を擦りつけてくる。

もうすっかり、理性がとろけている。サキは気持ちよくなりたくてたまらない。性欲処理にかこつけて、サキの体をこんなエッチに開発したのは私なんだ。優越感が爪先まで駆け巡って、思わず震えた。

「ね、サキ。おねだりして♡」

「な……♡ あ……♡」

「乳首切ないよね？ イジイジしてほしいよね？」

もみ、もみ。先っぽに指を近づけながら、重たい胸を揉みし
 だく。

「いっぱい甘やかしてあげるよ。ノータッチでびゅっ♡で
 きたら、おちんぼにもたっぷりご褒美あげるよ。かたっいお
 ちんぼ、破裂しそうだよね？ だから……くひひ♡」

「こ、このやろう……♡」

露骨に嫌な顔。さぞ屈辱だろう。優位に立ててゾクゾクする。
 Sに回るのも好きかもしれない。

「あと1時間ぐらい我慢できるなら、黙っててもいいけどさ。
 耐えられないよね。スッキリしたいよね？」

「……………」

口をへの字にして頷くサキ。もうこの時点で胸がきゅんとしたけれど、あとひと押し。膝を軽く回して、おちんぼを煽る。
 びくっ♡びきびきっ♡と押し返してくる。

「も……モエ……」

弱々しい声をあげながら、眉間に皺が寄る。

目を伏せて、私から一瞬だけ逃げて。

でも、このままじゃどうしようもないって分かっただけ。

私はじっと待った。

震える唇に、釘付けになっていた。

「頼む……いい、いじつてくれ♡ 乳首ジンジンして、苦しいんだ♡」

「うんうん、それでそれで？」

「イきたい♡ もう焦らされるのは嫌だ♡ チンチンも破裂しそうで、切ないのに……♡ ううっ……」

エメラルドグリーンの瞳がじわりと潤む。綺麗だな、と見入った刹那、雫がぼろりと溢れた。

あゝあ、やっぱり泣いちゃった。プライドの高いサキにこんなこと言わせたら、無理もないか。そんなところを見せられたから、意地悪する気もなくなった。

「くひっ、くひひっ♡ いいよぉ♡ やゝ、こうなっちゃうとサキは可愛いね♡」

「う、うるさい、バカっ！ さっさと——んあ♡ あ、んお……♡」

ピンと尖った所はさつきからずっと丸分り。薄手のTシャツとスポーツブラを隔てても、コリコリの弾力がそこにある。

「ひ、いいッ♡ んあ♡ は、あ、あ、あ、あ♡」

指先で転がして、てっぺんを爪で引っ掻いて。くるくる、かりかり。まだ軽めのタツチなのに、サキは胸を反らしてもう悶えている。

「くひひ、直に触るね♥」

「あつ、やめっ♡」

布地越しの感触がもどかしかった。サキのえっちな生乳^{なちち}も見なくなつて、シャツをブラごと捲り上げた。ぶるんっ♡と小玉のスイカみたいなおっぱいが勢いよく飛び出してくる。乳首はビンビンになっていて、指先大に膨らんでいた。

「やゝ、乳輪ごとぶくぶくって勃起してて、エロいねゝ♥」

むちむち肉厚の生おっぱいは、揺らすとぶるぶる波打つ。しっかりとしたお肌が気持ちいい。頬ずりしたくなるぐらい柔らかい。きゅっ&結んだ唇が、私の胸をくすぐる。

「あつ、ごめんね♥ 乳首がいいよね♥」

もちもちお肌を楽しみながら、焦らしに焦らした先端に指を這わせる。

「ひゃう♡」

つんっ♡と下から指で持ち上げると、サキの肩が跳ねた。親指と人差し指で、きゅうっ♡と挟んだら甘い叫び声上がる。ピクンと震えたおちんぼが、膝を押し返してくる。ぷくっ……♡と幹が太くなる。

「腰動かしちゃダメ。じっとしてて♥」

「む……むり、ッ♡ チンチンに、ひびいてっ♡ ひ、いい、お……♡」

乳首を優しく押し潰し、上下にシコシコしてあげる。おちんぼが連動してのたうち回る。ミルクを搾り出す要領で——実際には出ないけどね——ぎゅっぎゅっ&乳首を搾ってあげると、サキは仰け反って喉を晒した。

食べごろのサクランボみたいな先っぱ。美味しそうで、思わず舌なめずり。ふにふにのお肉に顔を埋めて、ちよっぴり赤ちゃんになりたくなつた。

「ね、舐めてもいい?」

唇を開くと、サキが息を呑む音が聞こえた。

「か……勝手にすれば、いいだろっ♡」

ぶっさらばうに言つたつもりなんだろう。でもその声色に期待がじゅわつと滲んでいる。

ぺろぺろ舐めてほしいんだ。

ちゅうちゅ吸ってほしいんだ。

右も左も、可愛がつてほしいんだ。

そう確信して、私はサキに吸い付いた。

「あっ♡ あ~~~~っ♡♡」

わざと音を立てて、思い切りしゃぶりつく。

唇で囁んで、舌でなぞって、埋め込むように押し込んで。

飴玉を転がす舌遣いでちゅばちゅばしゃぶりついて、左の乳

首もぐりぐり潰す。サキは悲鳴をあげたけれど、体を振ったって逃がすわけがない。

「あ、あつ、あつあつあつ♡ んお……お、おとおつ♡♡」

「くひひ♡ おっぱい気持ちいいね♡ 舐めるのと弄るの一緒にされると、おちんぼビクビクしちゃうね♡ ほくら、こりこりこり♡」

「はああ♡ んう♡ あ、ああああ♡♡」

ぴんぴん弾いてから、指の腹で優しく優しく潰してあげる。挟んだ指でねりねりしていると、膝に当たったおちんぼが先っぽを膨らませる。射精の前兆だ。もうイクんだ。おもらししちゃうんだ。見たい。サキのイクところが見たい。早く、早く♡「うっ、うう……熱いの上ってくる……♡ でる……もれる、もれるっ……♡」

「いいよ♡ ほら、イけ、イけ♡」

私の膝を押しつける勢いで、サキが腰を揺すりだした。

ああ、へこへこしちゃって可愛い♡

「触られてないのに出しちゃえ♡ ん♡ んちゅ♡ ちゅっ♡ ちゅぱっ♡ ちゅうっ♡」

「んおとおつ♡ も、だめ……♡ もれる♡ 白いのもれるっ♡」

サキがぴーんと胸を張った。びく♡びく♡びく♡とおちんぼが拍動して、焦らされきったイキ汁を吐き出していく。尿道の

駆け上がる精液が、膝越しにも感じられた。

「ハア、ハア……♡ あ……っ、ああ……♡ 出た、精子であ……♡」

サキは気の抜けきったトロ顔になって、まだかくく腰を揺らしていた。

「ん♡ 出ちゃったね♡ パンツの中、ドロドロになっちゃったね♡」

「い、いや……ゴム、してるから……っ」

「……へえ……♡」

ドルフィンパンツを脱ごうとしなかったのは、そういうことか。

だったら何も気にしなくていい。パンツの中に手を突っ込むと、触られずに弾けたおちんぼが、まだ余韻に震えていた。

「ん……♡」

「あつ♡ ホントだ……くひひ♡」

サラついたスキンの感触。先端がデロツと膨らんで、生温かい精液を受け止めていた。おちんぼの穴から、白いのがとろつとあふれてくる。

「んひひひっ♡♡」

ぎゅうっとなぐってあげると、サキは目を白黒させて腰を跳ねさせた。

「も、モエっ！ まだ、出たばかり——ひやおっ♡ んんっ、

んいいい……♡」

しっかり握って、勢いをつけて、竿をこしこし擦ってあげる。大きく膨らんだ提灯がぶらぶら揺れる。掌を押し返す脈動が、快感の大きさを物語っていた。

「ごめんね♡ 寂しかったよね？ ほらほら♡ こうしてはしかったよね？ あ♡ 勃起ちんぽシコシコ気持ちいい♡ このままもう一発イッちゃお♡」

「あとおおっ♡♡ ま、まっ、はい、はいっ♡ あっあっあっあっ♡」

射精したばかりのサキのおちんぽを、パンツの中で容赦なくしごきたてる。人差し指と親指でリングを作って締め付け、カリ首にガツガツ引つかける。サキの呼吸がどんどん浅くなる。

「ああ♡ あ♡ あ♡ あ♡ ダメ、モエっ♡」

出たばかりだけど、お預けちんぽに火が入るのはあつという間だった。タマタマがぐぐぐ♡と持ち上がって、竿に二発目が昇ってきた。

「いくっ♡ 出る、また出るっ♡ しほりとられる……う♡♡」

どびゅ♡ どびゅるる♡ びゅぶっ♡

あつという間に、二度目の射精。どくんどくと拍動するたびに、尿道が膨らんで、ゴム提灯が重たくなっていく。太いおちんぽの脈動が、少しずつ、少しずつ、間隔を広げていく。

「ふう……♡ ん、は……♡ あはあ……♡」

「やゝ、大漁、大漁♡ もういい？ スッキリした？」

おちんぽはまだ震えている。硬さを保った竿をゆるゆるしこいて、サキに尋ねる。

「……ん……♡ うう……♡」

サキはゆつくりと、首を横に振った。まだ射精したいみたい。赤かったサキの頬がますます紅潮する。

恥ずかしいのに、気持ちよくなりたいんだ。握られたおちんちんをくいくい押し付けてきて、気持ち悪いぐらいニタニタしちゃう。

「しよがないなー。ま、二回じゃ足りないよね。さ、脱がすから、腰浮かせて」

狭苦しいパンツの中から解放されて、おちんぽが首を振る。二発分、でっぶり溜め込んだコンドームが、自重で脱げそうになっていた。

「くひっ♡ サキってば、相変わらず皮被りだね♡」

「う……うるさい……仕方ないだろ……」

ずっしり重たいゴムを外すと、汗混じりの蒸れた精臭がむわっと漂ってきた。サキはハンサム寄りの綺麗な顔をしているのに、淫らなミスマツチだ。

「さ、ムキムキしようね♡♡」

「んっ、おんっ♡」

つるんっ♡と皮が剥けた。先走りと精液がぬらぬらとベッド

ランプに輝く。湯気の立つホカホカ生ちゃんぽが、ぴくっぴくっ
と震えている。私もサキも、先っぽの穴を見つめていた。

「不思議だよね」

「……何が」

「大きく硬くなつて、武器みたいなのに、触られると気持ちいい
弱点なんでもね、ここ♡」

「あ……♡ あっ……♡ あうう……♡」

皮をずると剥き下げて、幹と亀頭の境目を抜く。尿道の残
り汁が押し出されてぶくつと膨らみ、白い雫を作った。

茎を磨くような手コキをしていると、私はもう一度サキの恥
ずかしいリクエストを聞きたくなった。

「舐めてほしい？」

「……っん……♡」

サキが小さく頷く。

だいぶ素直になつたけど、まだ物足りない。

「言わなきゃ分らないよ？」

「う……っ、ん……♡」

「ほらはら♡ おちゃんぽどうしてほしいの？ 言つてごらん♡」

「くっ……♡ は、あ……♡ あ……あ……♡」

敏感すぎる亀頭を優しく撫でまわし、カリ首の段差をなぞる。

弱いところが密集した縫い目をなでなでしてあげると、サキは
腰を揺すって、おちんぽを押し付けてきた。またヌルヌルが溢

れて、ねばつとした糸を引く。

「ほら、早く♡ おねだりだよ、お・ね・だ・り♡」

「ん……っ、う……♡ あ……あ……あ……♡」

ずしつと重いタマタマを揉む。優しく握ると、ぶくつと先走
りが滴になる。このまますりゆすり擦ったら、そのまま噴水
が上がりそう。

ほら、早く。

早くおねだりしてよ。

ねだってるのは、私の方かも？

反り返ったおちんぽを撫でまわしていたら、サキはとうとう
観念した。

「……し……して……♡」

「ん？ 聞こえないよ」

「して、ほしい……チンチン、しゃぶって……♡」

来た。来た……♡

ああ、嬉しい。

何もされてないのに私がイッちゃいそう。

「え？ やだ。ぬるぬるして汚いじゃん」

「ご、ごめん……でも、もっ、モエの口がいい、っ……♡」

「手じゃダメ？」

「く、口♡ 口がいいっ♡ あったかくてぬるぬるの口♡」

低めの声はもう1オクターブ上がって、媚びに媚びていて。

おちんぽがぶんぶん頭を振って、粘った糸を振り回している。
もう頭の中がおちんぽなんだ♥

「しょうがないなあ♥ サキのわがまま、聞いてあげるね、く
ひっ♥」

私の声に、おちんぽが先に反応した。玉になっていた白い先
走りが、たら〜と幹を落ちてくる。

私も我慢できなかった。涎が垂れていたかもしれない。舌な
めずりして、サキを仰向けにした。M字に脚を開かせると、犬
のしっぽみたいにおちんぽが揺れた。

「脚閉じちゃダメだよ。おちんぽ舐められてる所、ちゃ〜んと
見てるんだよ♥」

「あっ……はあ、ああっ、舐め——おうっ♡♡」

ちゅっ。縫い目に口付けして、剥き慣れない亀頭を舐め
回す。しょっぱいものが溜まった溝も、縫い目の皺も。おちん
ぽは先走りをばたばた垂らす。

「れろっ♥ れるっ♥ れるっ♥ んふ……ぴちゃ♥ ちゅっ
♥ ちゅ……♥」

「ふうっ♡ あ、あッ♡ おお、っ……♡」

すごく硬い。おねだりで限界が一気に近づいたみたいで、先っ
ぽが絶えず震えている。じゅぽじゅぽしたらすぐイキそう。で
も、さすがにそれじゃもったいない。

少しは我慢してよね。上目遣いで私はそう語りかけた。

「いただきます♥」

口を大きく開け、吸い付きながらサキを咥えこんだ。

「ほッ♡♡ おア……あつたかい……♡」

「んふ……んちゅっ♥ んむ……♥」

おちんぽを根元まで頬張ると、口の中に生々しい匂いが広
がった。鈴口からしょっぱいものがじわじわ滲み出てくる。歯
を立てないよう粘膜をすばめて、ぴたっとおちんぽを包む。そ
してゆっくり……引き抜いていく。

「ぬぽ……♥ つぢゅ♥ つぽ……♥ つぽっ♥ ぐちゅ……
♥」

「あ、お……♡ モエ、あッ♡ チンチンとろけるっ♡ ヌル
ヌルして気持ちいいっ♡」

唾液をたっぷり絡ませながら、亀頭をねっとり吸い上げる。
ウズラの卵みたいなコロコロの睾丸を揉んであげると、サキは
たまらずはしたない声をあげる。

「ン……♥ じゅるるる……♥ じゅっ♥ ぐゅぽ……♥」

「ほ、オ♡♡ まっ、待ってくれ、そんな吸いついたら、すぐ
イく……っ♡」

「くひひ♥ 出る時はちゃんと言うんだよ♥ はもっ♥ んぶ
……♥」

くびれの裏側をこそげ取り、裏筋と雁首を重点的に責める。
タマタマに隠れた女の子もベトベトだった。穴に指を這わせて

みると、待ってましたとばかりにずぶずぶ飲み込まれていった。
「は、あつ……♡ に、二点責め、え……♡♡」

おちんぼにも響くように、陸天井をねちっこくしごく。Gス
ポットをくにくに押しながら亀頭を吸ってあげると、どろっと
した先走りが溢れてきた。一瞬、射精したのかと勘違いしたぐ
らい。

「ほ、おおん♡ おふっ……♡♡ きもちいい、きもちいい♡
……♡」

「じゅぞっ♡ ずずず♡ じゅるるる♡」

「あつあ……♡♡ あ、はあア……♡♡」

私が押さえていなくても、両脚はだらしなく開きっぱなし。
赤ちゃんのおむつ交換みたいな恰好で、サキは蕩けた声をあげ
ている。

嬉し涙みたいな我慢汁がトロトロ溢れっぱなしで、吸っても
吸っても止まらない。哺乳瓶にしては飲み口が大きすぎるし、
そもそも授乳する側、される側がこれじゃあべこべだ。

サキの蜜はだんだん重たくなってきた。舌触りがもったりし
て、精子が混じり始めている。

もう出ちゃいそうなんだ。このまま口の中でイかせてあげる
つもりだったけど、サキの口からそれを聞きたくて、おちんぼ
を口から離した。唾液まみれの亀頭と唇に、ねばっと橋がかか
る。

「な……なんで止めるんだ……意地悪するなよ……♡」

「焦らないの。ね、サキ。ごっくんしてほしい？」

「あ……♡♡」

生唾を飲み込む音。部屋の外にも聞こえたんじゃないかな。
私の鼻先で、血管を浮かせたおちんぼを舐くように仰け反らせ
て。

「し、してほしい♡ 口の中に出したい♡♡ 飲んでほしい♡
♡ だから、モエ……お願いだ、チンチン、チンチンのつづき
……♡」

「しょうがないなあ……くひっ♡」

駄々をこねるみたいにお尻を振って、サキが懇願した。

ああ、素直になった……♡

達成感で、涎が垂れそう。

こうなったらもう、言われなくてもしゃぶってあげたい。逃
げられないよう腰をつかんで、私はカチカチのおちんぼを頬
張った。

「んふー♡♡ んふー♡♡ おオッ♡♡ おっ♡♡ おおおおッ

♡♡♡

「ぢゅっ♡♡ ぢゅぼ♡♡ づばっ♡♡ ずぢゅ♡♡ ちゅう……♡♡
♡」

のどの入り口まで使って、下品な音を立てる。頬を窄めて強
めに吸い付き、竿全体をしごいてあげる。サキのお尻が浮き上

まで、出されたそばから飲まないと溢れてしまう。

イきたてホヤホヤのおちんぽを吸われて、追ひ撃ちが放たれた。それとも、ついさっきの残り汁かな。濃さも勢いもそのま

びゅくん♡
ぼびゅ♡
びゅぐぐぐつ……♡

もれるっ……お♡」

「ほ、お、お、おおおん♡ あつあつ、今それされたら、また、

「ぢゅぞぞぞぞぞつ♡
ぢゅるる……♡」

に、サキはブリッジしたまま痙攣していた。

射精中の亀頭を口内で転がし、拍動に合わせて啜ってあげる。濁った鳴き声がベッドルームに響き渡る。電流を流されたよう

おちんぼが大きく胴を揺らした。溶けたチーズみたいなものがぶちまけられる。喉奥にべしやべしや当たつてえずきそうだ。でも、サキがイッてるのが嬉しくて、ねだるように吸つてしまふ。



びゅうっ♡
びゅるるるるっ♡♡♡
どびゅるるるるるるっ♡

あ、イグ♡
でるう……ツツ♡」

「おっ♡ おア……ア~~~~~♡♡♡ モエ、いくつ♡で
るでるでる♡♡♡ イくつ♡♡♡ モエの口に出す♡♡♡ あ、あ、

がつていく。「今から射精するぞ」つて意気込みみたいに、おちんぽを突き上げてくる。

「ハア♡
ハア♡
お、ん……♡
んっ、ん……♡」

「ふはっ♡
くひひ、
お疲れ様♡」

ミルクをいっぱい吐き出した亀頭へディープキスをたっぷり浴びせて、サキに見せつける。おちんぼを綺麗に掃除しながら、サキの引き締まったお腹を撫で回す。お臍の周りをくるくるなぞってあげると、おちんぼはそれにもぴくぴく反応する。

「ほお……ん……はあ……♡」

まだまだ濃厚な精液を飲み干し、最後の一滴まで啜り取って、おちんぼを解放してあげた。イッた余韻でトロトロのサキは、目を逸らすことも忘れ、私の顔をぼんやりと見つめていた。

あれだけ出したのに、サキのおちんぽはまだ長いままで、不満があるみたい。

それもそつか。今日はまだ、されるがままだもんね。

自分で使って、女の子の穴をほじほじしたいよね。

「まだ元気なら、入れる？」

「……！」

私の問いかけに、サキは一瞬目を丸くした。

同期の乱れる姿に、私もすっかりあてられていた。ショーツの中はムレムレで、穿き替えたばかりなのに洗濯機に逆戻りだ。穴が疼いて、塞いでほしくて。だからここで「もう満足した」なんて言われたら、ちょっと困る。

でもそれは、ほんの取り越し苦労だった。恥ずかしそうな顔

きが返ってくる。私はそこで、もう一声欲しかったけれど——早く先に進みたかった。

「じゃ、サキが上ね」

仰向けになって両脚を開く。さつき柔らかくなりかけていたおちんぼはもう、臍につきそうなくらい反り返っていた。本番を前にして、血管がびちつと太く巻き付いている。肉厚で遅しくて、お腹の奥から蜜がとぶつと湧いてきた。

サキが覆い被さってくる。興奮に揺れる肩の下、たぶつと弾むおっぱいの陰から、勃起ちんぼが顔を出す。

「ナマでするの?」

剥き出しの亀頭に問いかけると、ばつが悪そうにサキが目を見送る。

「す……すまん。在庫が……でも」

「そうだよね。おちんぼ硬くしたままじゃ中座できないよね♥でも、いいよ。今日は大丈夫だし、もし危険日でも……くひひ……♥」

「お前な……!」

顔は怒っていても、全然怖くない。

どうしたいのか、この体勢が語ってるから。

「あれ? ねえサキ、我慢汁が膨らんでるよ? 興奮しちゃった?」

頭より先に、おちんぼが反応する。「はいそうです」と言わ

んばかりに、サキの呼吸も大きくなった。

「サキのよわよわちんぼで、ナマ挿入なんて大丈夫? 入れて早々暴発しない?」

「バつ、バカにするなっ!」

「ホントかなあ? ま、おいでよ♥ 私もおちんぼ欲しいし……ね?」

ねちゃつ……と穴を広げて、さらに挑発する。「欲しい」と口にした途端、お腹の奥で熱が膨らんで、じゅわつと広がっていく。私も下品なことを言いたくなった。

「ずぶずぶ♥♥♥つて入れて、穴をホジホジして、おまんこガリガリ削ってほしいな♥♥ その太くなったおちんぼ、頬張りたいな♥♥♥ ね、ちようだい♥♥ 生ハメしたいよ♥♥」

「……! フッ……♥ フッ……♥」

サキの呼吸が浅くなる。自分の重みでぶらさがっていられなくなった先走り、ぼとつと鼠径部に落ちてくる。

「ハア、ハア……お、おまんこ……♥♥ モエのおまんこにいれるっ♥ ハッ♥ ハッ♥」

「っあ……おちんぼ硬い……♥」

「い、入れるからなっ♥ 覚悟、しろよっ、お……♥」

おちんぼの切っ先が割れ目に当たって、甘い痺れが背筋を駆け抜ける。ずつと放置プレイで、私も待ちきれない。サキを煽っておきながら、こっちがメチャクチャにされちゃうかも。

「ハア、ハア……あ、入るっ♡ ああっ、モエのナカ狭くて熱いっ♡ ほ、おほ……♡」

サキがゆっくり体重をかけてきた。肉を割り開かれる。粘膜が擦れる快感に、思わずはしたない声が漏れた。

それでもサキの方が余裕がない。半分ほど竿を沈めた所で、立ち止まってしまった。

「何してんのさ。早く根元まで入れなよ♡」

「うう……♡ そんなに締められたら、チンチンが……♡」

私の腰を掴んでおいて、指先がぶるぶる震えている。熱い龟头が、もう膨らみ始めていた。

「まだ入りきってないよ？ ざこ過ぎない？」

「……くそ……見てろよ……♡ んんんっ……♡」

「あ……ふ、ん……♡ きたあ……♡」

こっん……と奥まで届いた。長い竿が私を満たし、内側から圧迫してくる。

ゴム一枚の壁もなく、直に触れ合う粘膜は熱い。呼吸するたびにジンジン気持ちいい。サキのおちんぽに焦がされそうだった。

「は……ッ♡ ん、ぐうう……♡」

サキが菌を食い縛っている。ぶるぶる体を震わせて、射精を我慢していた。剥かれた包茎ちんぽに生のおまんこは刺激が強すぎるかも。

やつぱり私の上になってあげた方がいいかな。そう思っていたけれど、やがてサキは腰を引き始めた。ゆっくりと、慎重に。ずるっ……♡ ぬぼっ……♡

ギリギリまで引き抜かれる。龟头の半分ぐらいまで顔を出したおちんぽは、私の蜜でテカテカだ。ドロドロの愛液が、私の興奮を突き付ける。出し入れされたらすぐイきそうだけど、ザコちんぽが先だろう。

「う……動かす、ぞ……おッ♡ おつ、お♡ ほおお……♡」

喘ぎながら、サキが腰を振る。奥まで埋め込み、肉の深さを味わってから、重力に逆らって腰を持ち上げる。恐る恐るで鈍い動きだったけれど、ちよつとずつ一定のリズムが作られていく。

お尻が浮いて、おちんぽの抜き差しがよく見える。ぐちゃぐちゃ水音がする。私の泉が掻き混ぜられる。目の前には、唇を結んで快感に耐える顔と、ゆつさゆつさ揺れる大きなおっぱい。

——ぐちゅ……ぐちゅっ……♡

——ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡

「ん♡ はあ……♡ サキのくせに頑張るじゃん……♡」

「ふっ♡ あ♡ んっ、んっ、んっ……♡ くそ、このお……っ♡」

「もつと奥まで突いてよ♡ これじゃイけないよ♡」
わざとらしく挑発すると、赤い顔がさらに赤くなる。

「う、うるさいっ♡ この、この、このっ……♡」
 「くひひ♡ がんばれ♡ がんばれ♡」

よわよわ勃起ちんぽは、ビクンビクン震えつばなしだ。鼓動のテンポで波打ち、引き絞られた弓みたいに張りつめている。サキは快感に弱すぎるのかもしれない。それでも私にバカにされたくなくて、一生懸命に腰を振っている。健気で、可愛くて——ちよっぴり愛しい。両手を伸ばして、抱きしめたくなる。「ハァ♡ ハァ♡ ハァ♡ ああ、うつ、ふう♡ ふっ♡♡」

——ばん♡ ばん♡ ばん♡ ばん♡ ばん♡
 肌の弾ける音が立つ。私の上で必死にピストンするサキと、不意に目が合った。眉間に皺が寄り、鼻息は荒い。唇はぎゅつと結ばれている。「気持ちいい？」と問いかけると、サキはぶんぶん首を縦に振った。

ねえ、可愛すぎるでしょ。

好きかも……♡

「っく、う、くうう……♡」

リズムカルに腰を振っていたサキが、動きを止めてしまった。ぶるぶる体を震わせている。はーっ、はーっと深く息を吐いて絶頂を堪えているけれど、そろそろ辛そうだ。

「どうしたの？ もういいの？」

「ま、まだっ♡ まだ……♡」

「なら、早く腰振りなよ♡ それとも、もう限界？ やーい、ざーこ♡ 負け犬ちんぽ♡」

「……っ……♡」

よわよわちんぽ。ザコちんぽ。

私の下品ななじり文句にも、サキのおちんぽはバカ正直に反応する。びくんと頭を持ち上げて、また先走りを漏らした。その拍子に、奥のイイ所が圧迫されて、甘い快感が脳天へ突き抜けた。

——ぐちゅっ♡ ずちゅ……♡ ずちゅ……♡

奥深くでジツとしていたサキが、ゆっくりピストンを再開した。

正直にいうと、サキのおちんぽはすごく気持ちいい。長くて太くて、奥のイイ所に届いてくる。友達同士でセックスする危うさも、私の心に深々と刺さる。

でも、上に立っていたい。サキには負けたくない。

入口、天井、奥。弱いところを責められて、深イキしないよう軽イキを繰り返して誤魔化す。私も私で、必死だった。

——ずぶっ♡ ずぶ♡ ぶちゅっ♡ ずぶ♡

「……うつ♡ お、おお、お……キツイ……♡」

「おっ？ くひひ♡ いいねいいね♡ ほら、もつと速く♡」

——ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡

「く、う……♡ ん、んっ、んっ、ん♡ あア、モエ、そんな
締めるな、っ♡♡」

「その調子だよ♡ ほらっ、がんばれ、がんばれ♡ 乳首ぎゅ
っって、応援するね♡ こりこりこり……♡」

「お、おうっ♡ やめ、ちくび……ッ♡」

ぷるぷる揺れる先っぱを摘まみ、ぐりぐり潰した。サキが仰
け反って悶える。でも、腰を振る速度が上がった。おちんぼに
夢中なんだ。

ずりゅ♡ ずりゅ♡ ずりゅ♡ ずりゅ♡ ずりゅ♡

「ん……♡ いいよ、サキ……♡ きもちい……♡」

ナカを引っ掻き回されて、猛烈に子宮が疼く。サキへ言葉を
投げかける私も余裕がない。変にやせ我慢しているから、深イ
キでなくて、それがもどかしい。

結合部はどっちの体液か分からない粘液がぶくぶくに泡立っ
ている。太く膨張した肉の杭が、私の蜜をたっぷり吸って、メ
ス穴をずばずば犯している。気持ちよすぎて、おかしくなりそ
う。

——ばちゅ♡ ばちゅ♡ ばちゅ♡ ばちゅ♡

——どちゅ♡ どちゅ♡ どちゅ♡

「フッフ♡ フッフ♡ フッフ♡」

「んっ、おっ、おッ♡♡ はア♡♡ もう出ちゃいそうなくせに、
やるじゃん……♡」

サキは菌を食い縛ったままだ。でも、おちんぼは限界を迎え
て、ナカで絶えず暴れている。腰遣いも雑で、イクことしか頭
にないんだ。

でも私も私で、何も考えられない。おまんこがおちんぼに食
いついて、離そうとしない。中に熱いのを浴びる瞬間が待ち遠
しくて、早く欲しくて、イキたくて……。

「も、モエ……ごめん、もうダメだ……♡」

「んっ……♡」

——ごちゅっ……♡

きつく抱き締められた。深々と挿入して繋がり合ったまま、
サキはぶるぶる震えている。くいつくいつと押し込むのが精一
杯で、もう動けないみたいだ。

「うっ、も……♡ で、る……のほってきた♡ ねもとまで、
きてるっ……♡」

「……いいよ♡ いっぱい出して♡」

「……あ……♡」

私が耳打ちした瞬間、おちんぼがぶくっ膨れ上がった。

「ん♡ おッ♡♡ おおおおお♡ でる、でるうっ♡
しゃせいするっ♡ モエのなかにぜんぶだすっ♡」

——びゅるっ♡ どびゅるるるう……♡

ごっつ、と子宮口を叩いた瞬間、サキのおちんぼが思いきり
跳ね上がった。精液を吐き出す喜びに大きく震えて、おちんぼ

がびくんびくんと頭を振り回す。

「ぶぶぶッ♡ チンチンいぐ……♡ でりゅ……♡ しほり、
とられりゅ……っ♡♡」

——どく♡ どぶどぶどぶ♡ ごびゅっ♡

「あ……私も、イく……っ♡ ~~~~~っ♡♡」

煮えたマグマを叩きつけられて、絶頂に押し上げられる。サ
キの腰に脚を絡みつけ、背中を丸めて、子宮口から精液を直飲
みする。必死にしがみついていないと、意識が飛びそうだった。

「は、おとお……♡ あ♡ まだ、でる、う♡ お……おほ、お
……♡」

獣のような声をあげて、サキが痙攣する。

重ねた我慢の分、射精が長い。

ビキビキに膨張したおちんぽからびゅるっ♡どぷっ♡と重
たい粘液が何度もぶちまけられる。抱き締める力が強すぎて
ちよっと痛いけど、悪い気はしなかった。気が付けば私も手を
回して、下から抱き着いていた。

——ごびゅ……♡ びゅるる……♡ びゅっ♡

「はあ……はあ……♡ すっごい出たね……♡」

「うっ、あ……お、お……♡」

「あっ♡ こら、まだイッたばかり、なんだから、さあ……
♡ あ、んっ♡ ん~~~~♡」

サキが腰を回している。まだ跳ねるおちんぽが、子宮口にく

りぐり押し付けられる。まるで、所有欲を剥き出しにしている
みたい。

深イキでふわふわしているからか、何も言わずに受け入れて
しまう。幸福感が指先まで満ちて、体がぼかぼかする。全身に
行き渡る快感に浸っていると、ぼたりぼたりと水滴が落ちてき
た。

「ひっ……ぐ……」

「ふふ……♡ 泣くことないじゃん、もう♡」

挿入する側になっても、挿入される側になっても、サキはい
つもこうなる。神経が快感の大津波を受け止めきれずに、情緒
がおかしくなってしまう。私の胸に顔を埋めてすすり泣きしな
がらも、サキのおちんぽはまだ、私のナカでびくりびくりと微
かに震えている。

「……スッキリした？」

頭を撫でてよしよししながら尋ねると、サキは小さく頷いた。
やがて、泥を捏ねるような音と共におちんぽが引き抜かれて、
膣内射精された精液がべつとりとお尻まで垂れてくる。とりあ
えず手近なタオルを敷いてシーツを守り、練乳まみれのおちん
ぽに顔を近づける。

「っひ……♡ んあっ♡」

怯えたようにサキが腰を逃がそうとする。それには構わず、
先っぱを咥えた。根元までしっかりしゃぶって、カリ裏のくび

あんまり機嫌はよくなさそうだし、背を向けて寝ているのかな。そう思ったけれど、サキの顔はこちらを向いていた。さすがにまだ、ヘイローは煌々と光っている。

「……なんだよ」

ミディウムボブの髪をさらさら撫でてみると、片目が開いた。私に何かされると思ったのかな。「何でもないよ」と答えると、サキはムツとしたように唇を失らせて、また目を閉じてしまう。何でもあつてはしなかったのかな。

隙だらけな唇が、常夜灯の光にぼうつと浮かぶ。

キス——しちゃおうかな。

そう思ったけれど、私もサキもそこだけは大事に取つてある。その代わりに、前髪をめくつて、おでこをなでなで。サキは眉をひそめたけれど、今度は何も言われなかった。

指に巻き付けては解き、髪を弄ぶ。そうしながら観察していると、サキの顔が緩んで、ヘイローが少しずつ薄れていく。

ああ、寝ちゃったか。

こうなると、もうすることもない。

私は毛布をかぶり直して、眠りに誘われるのを待った。

ただ性処理をしてあげてただけ。
それだけのことなただけ。

サキの寝顔が目の前にあると悶々として、私はなかなか寝付
けなかった。